

B-18 けい光ランプによる色疲労について

岐阜大 中野みち滋

1. 最近、一般家庭では照明としてけい光灯あるいは白熱灯を使用している場合が多いが照明とは、単に光を使うということだけでなく、その質（光の拡散、分布、色）や量（照度）について考えることが大切である。すでに光源による退色性、演色性の現象が医学的な方面からも、また、被服デザイン的一端としても多く研究が進められている。そこで本研究においては、けい光ランプの明るさが、われわれの視角にどんな影響を及ぼすかについて、実験を行なったので報告する。

2. 被験者は左眼を真黒の眼帯でおおい暗室に入ってから、5分間安静にして実験にかかる、疲労度は退色疲労するまでの時間をもって表わす、片眼にて規定照度で退色疲労するまでの時間を測ったら、ただちに、つぎの規定照度に変え5分間休めてつぎの時間を測る。

3. (1) 青色系統の色物を扱う作業において眼の疲労を少なくし、且つ演色性は昼光色系が比較的好く、その明るさは550 lxがよい。

(2) 赤色系統の色物を扱う作業において眼の疲労を少なくするには白熱灯を用いた方がよい。

(3) 長時間の作業において眼の疲労を最も少なくするには白熱灯及び白色系ランプでは、その明るさは550 lxがよい。

(4) 暗い所の作業において眼の疲労を少なくし作業能